

● 誌上ギャラリートーク

こどもアートスペース開設記念! プレイベントを開催します!!

高松市美術館はリニューアルオープンに向けて、改修工事中です。リニューアルオープン後には「こども+^{プラス}(こどもアートスペース)」が新設されます。ここでは、子どもとその保護者をはじめとした誰もが、作ることを楽しめるプログラムを提供する予定です。また、子ども向けの美術図書や所蔵作家の絵本など、美術に親しみを持ってもらえるような本を揃えた読書スペースも設置します。

現在、新施設のPRを兼ねて、リニューアルオープンプレイベントを開催しています。10月31日(土)に、第1弾「はじめてアート・色で遊ぼう！」が行われました。このワークショップでは、未就学児の子どもたちを対象として、芸術士の谷由貴さんと自由に絵を描いてもらいました。画用紙の色を選ぶことから始まり、クレパス、折り紙、マスキングテープ、絵の具と様々な素材を使って、絵を仕上げていきます。約2時間夢中に描いた作品はどれも素晴らしい出来上がり。未就学児向けワークショップは高松市美術館ではほとんど初めての試みでしたが、「こども+^{プラス}(こどもアートスペース)」開室後にも定期的に開催していきたいと思える素敵なイベントになりました。



谷由貴ワークショップ
「はじめてアート 色で遊ぼう！」

さて、プレイベントはまだまだ続きます。11月28日(土)の第2弾「アートを使ったリハビリを体験しよう！」では、かがわ総合リハビリテーションセンターの作業療法士・大野香織さん、橋本千代美さんに、リハビリセンターで行われているアートを使ったリハビリを紹介してもらい、実際に体験しました。12月6日(日)開催の第3弾「幅允孝トーク&ワークショップ」では、ブックディレクターの幅允孝さんに「選書」という仕事についてお話いただいた後、「こども+^{プラス}に置く本」というテーマで皆で選書にチャレンジ。12月19日(土)と1月30日(土)に行われる「出張! アートで遊ぼう！」では、紙で雪を作って部屋に舞わせたり、部屋を虹色の布で覆ってみたり、遊びながら色や素材の違いを楽しみます。開館直前3月5日(土)には、「こども+^{プラス}開室記念ワークショップ 看板を作ろう！」と題して、高松市在住の画家・福井秀巳さんと「こども+^{プラス}」の看板を、三町ドームで行き交う人にも手伝ってもらいながら作りあげます。



トーク&ワークショップ
「アートを使ったリハビリを体験しよう！」

プレイベントを通して、市民の皆さんが、「こども+^{プラス}(こどもアートスペース)」に、そして高松市美術館に、これまで以上に親しみを持ってもらいたいと思っています。プレイベントをそして開館後の高松市美術館をどうぞお楽しみに!

※各イベントの詳細は、高松市美術館ホームページをご覧ください。

[高松市美術館学芸員 石田智子]

6/13

できやよいワークショップ「うちわに絵を描こう！」

(高松市歴史資料館)

アシスタント

サンクリスタル高松にて、できやよいさんによるワークショップ「うちわに絵を描こう！」のお手伝いをしました。

竹の骨組みの白いうちわにマジックや絵の具で描いたり、和紙やスタンプ押ししてエンボス加工した折り紙をコラージュしたり、陽気なサボテンやパンダの顔をした魚など、できさんのオリジナルキャラクターのスタンプを押したり、手形を押したり、思い思いの材料や手法で描きました蛍光ピンクや黄色などの明るい色で折染めされた和紙がとても新鮮で、切ったりちぎったり楽しんでいました。

暑い夏を吹き飛ばすすてきなオリジナルうちわが完成し、帰りにはできさん特製髪留めもお土産にもらい、みなさん満足顔で帰って行きました。 [田中えり子]



7/5

高松市塩江美術館特別展「四宮金一展」
見学及び四宮金一氏ギャラリートーク参加

7/18-8/9

特別展「高松市美術館コレクション展2・後期
とびだせ！いきものずかんー讃岐漆芸と現代アート」

(高松市歴史資料館、会期中毎日曜・祝日)

ギャラリートーク

「いきもの」をテーマに讃岐漆芸と現代アートを紹介する展覧会です。漆芸の超絶技巧による昆虫達や、やきものによるユーモラスなオバケ達。江戸時代末期から現代まで、作られた時代も、作家の年代も手法(彫刻、絵画、写真、やきもの、漆芸)も異なる個性豊かな「いきもの」達です。なかでも、土屋仁応の古代中国の伝説上のいきものと言われる《麒麟/Qilin》は、目に水晶の玉眼を入れ、作品表面に淡い彩色を施した、伝統的な仏像彫刻の手法で作られた木彫です。凛とした美しさとはかなさを漂わせ、神々しささえ感じさせる神秘的な作品です。その前で魅入られたように長い間見つめていた女性の姿が印象的でした。トークの当日は、高松でもこの夏一番の暑い日だったので、クーラーが効かず、汗が流れお客様から団扇で扇いでいただきながらのトークとなりました。暑い中最後までお付き合いいただき感謝でした。

[山上紹代]

7/25

稲崎栄利子ワークショップ
「やきものでいきものオブジェをつくらう！」

(高松市歴史資料館)

アシスタント

陶芸家・稲崎栄利子さんを講師に迎え、やきもので「いきもの」を作りました。高齢の方から親子で参加の小さな子ども達まで、各々が思う「いきもの」をデッサンし、型が決まると粘土で形を作ります。黒い粘土を基本に、焼くと赤くなる粘土や白くなる粘土、石英のかげら(焼くと乳白状のガラスに)、小さな粘土のパーツ等を組み合わせて作品を作ります。素材の特性や粘土の扱い方を教わり作り出したのですが、なかなか思うように行かず苦労する子もいましたが、先生のアドバイスで見事、コウモリが飛び、長〜い鼻のゾウさんも歩き出しました。満足そうな子ども達の顔。焼き上がりが楽しみだね。 [山上紹代]



2015年4月～11月 civiの主な活動

4/1 しびの一と30号発行

5/20-31

特別展

「高松市美術館コレクション展1・前期 戦後日本の版画」

(香川県文化会館、会期中毎日曜日)

ギャラリートーク

美術館から「おでかけ」して開催した4つのコレクション展のうち、最初の展覧会「戦後日本の版画」のギャラリートークを担当しました。「おでかけ」した作品は、横尾忠則、池田満寿夫など作家9人の版画・ポスター作品計約70点。そして「おでかけ」先は、番町にある香川県文化会館です。会場入口を入るとまず横尾忠則の作品から始まります。作品数が30点近くと最も多い横尾を中心にトークを考えました。横尾のポスター作品の面白さは、様々な技法を使ったデザインですが、画中には作家個人の私的な出来事や人間関係がわかるモチーフもあります。展示されたのは1960～80年代の作品で、この頃の横尾を知ればもっと面白いはず。資料をまとめている時に偶然、横尾忠則自伝『ぼくなりの遊び方、行き方』(ちくま文庫)を見つけました。作品が出来るきっかけや描きたかったことなど背景がわかり制作秘話としてトークの役に立ったことは言うまでもありません。他の作家7人の版画作品も横尾と同じく60～80年代の作品が中心で、同じ版画という技法でも作家が表現する違いなどを見比べることが出来る展示でした。

[三好ひさ子]



6/6-7/12

特別展

「高松市美術館コレクション展2・前期 ひとのかたち
ーゼロ年代以降の現代アートを中心に」

(高松市歴史資料館、会期中毎日曜日)

ギャラリートーク

高松市美術館改修工事に伴うおでかけコレクション展の第2弾として、高松市歴史資料館で約25点の作品が紹介されました。「ひとのかたち」という古くから美術の世界で取りあげられているテーマを、現代アーティスト達は様々な手法で表現してきました。そのなかの1点、ヤノベケンジの《ミニアトムスーツ》は社会性のある強いメッセージを私達に投げかけていました。なにやらかわいらしい黄色い服を着た子どものロボットが会場入口に展示されているなあ。まるで鉄腕アトムみたい。などと思って見ていると、服の上のデジタル数字がカウントしています。実はこの作品にはガイガーカウンターが搭載されていて放射線量を測定しているのです。1986年におきたチェルノブイリ原発事故の後、ヤノベはその地を訪れ、そこで暮らす男の子に会ったことから制作した作品です。このように社会的メッセージの強い作品もあれば、作者自身の心を身体の描写を通して表現した作品、あるいは名画の中から人物だけを消し去ってしまった作品など、じつに多彩。これからも「ひとのかたち」は永遠のテーマなのでしょう。

[鈴木典子]



8/2-16

特別展

「高松市美術館コレクション展1・後期 トリックと反復」

(香川県文化会館、会期中毎日曜日)

ギャラリートーク

お出かけコレクション第4弾となる「トリックと反復」は香川県文化会館で開かれました。2階の入り口には、草間彌生の《無題(金色の椅子のオブジェ)》が《無限の網H.H》を背景に浮かび上がります。夏休みに訪れた親子連れの方たちは、不思議な視覚体験をもたらす作品やスーパーリアリズム、ライトアート等のトリック的な作品を、色々な角度から眺めたり、覗き込んだりして楽しんで下さいました。ユニークな作品たちとの出会いが、現代美術への鑑賞の入り口になって欲しいと思っ



[富岡洋子]

8/1 高松市塩江美術館 美術館の日 ワークショップ

アシスタント

美術館の日ワークショップは、川遊び日和の暑い夏の日、塩江美術館にて行われました。川で拾ってきた様々な形の石からお気に入りをを選び、アクリル絵の具で装飾し、動物やオブジェを作るコーナー。A5位の大きさのボードに両面テープかボンドで色の付いた砂で絵を描く砂絵のコーナー。こちらもA5位のボードに木の枝や葉っぱ、毛糸などをボンドで固定しながら、平面や立体を作るコーナー。いずれのコーナーも、素材を自分で選んで、好きなものを作ります。特に制約はないけど、見本もあるので、何を作ろうと迷っても大丈夫!好きなものを好きだけ…家族で参加してくれた方も多かったです。自然に囲まれ風を感じながら、大人も子どもも楽しんでいたワークショップでした。



[田中えり子]

9/24 四国子どもとおとなの医療センター 壁画プロジェクト「海を渡る蝶」

アシスタント

秋雨の中、善通寺市「四国子どもとおとなの医療センター」の壁画プロジェクト「海を渡る蝶」のワークショップに参加しました。このプロジェクトは医療センターとお隣にある養護学校の間にある全長50メートル程の壁(養護学校側)に蝶の壁画を描くというもので、この日は養護学校生たちが本番と同じ技法にチャレンジしました。その技法は、蝶をかたどった型紙を当ててマスキングしローラーで色を塗る、というものと、蝶をかたどった型の中に色とりどりのモザイクタイルを貼るというもの。ローラーを大胆に使う生徒や、慎重に色を選んで塗る生徒、タイルを大胆に割る生徒や、こわごわ割る生徒もいて、それぞれのペースで作業は進みました。この日は時間と天候の都合で室内での作業までで終了。後日、完成した壁画を見たくて、フェスティバルで賑わう医療センターを訪ねました。壁面に舞う蝶たちと、はるかに高い設備棟に羽ばたく蝶は、イメージのもととなった、繊細でありながらも遠くへ飛翔する力を持ったアサギマダラそのものでした。蝶たちは、ここから卒業してゆく学生たちの姿と重なり胸が熱くなりました。

[高木由貴子]



8/12 浅野放課後児童クラブ「アートで遊ぼう！」

(高松市立浅野小学校)

アシスタント



夏休みの真っ只中、出張アートで遊ぼう!

のため、浅野放課後児童クラブを訪問しました。出迎えてくれたのは、小学1年生から6年生まで総勢49人!幅広い年齢層を考慮して、学年ごとのグループに分かれて遊びました。1年生はポスターの裏に大きな丸を描き、丸の中を飾り付けて花火のような作品にしました。2年生はポスターの裏に寝転がり、自分の輪郭を縁取り、等身大の自分の分身に色ぬりをしていきました。3年生は予め切って用意していた顔のパーツや服装のパーツの紙片を組み合わせて、個性的な顔のコラージュ制作。4~6年生は安藤正子さんの《竜の背中》の巨大パズルに挑戦しながら、じっくり作品を鑑賞しました。子どもたちのパワフルさで、楽しい時間になりました!

[翠さやか]

はじめまして! 新人学芸員からのごあいさつ

こんにちは、4月から高松市美術館でお世話になっております石田智子と申します。生まれも育ちも大阪で高松初心者ですが、皆様によくしていただいたおかげですっかり高松に馴染んできました。大学卒業後、神戸ゆかりの美術館で学芸員として働き、大学院に戻りベルギーで1年間の留学を経て、高松市美術館にやってきました。大学院では江戸時代の絵画を研究していましたが、高松市美術館のコレクションもこれまで開催された展覧会も素晴らしいものばかりで、現代アートと讃岐漆芸にどんどん惹かれていっています。瀬戸内の美しい島々、街中にある安くて美味しいうどん屋さんなど、香川独自の文化にも興味津々です。これからも末永くどうぞよろしくお願いします。

[石田智子]

9/26-27 金沢アートの旅

復活! わき役のひとりごと。

第5回

僕は犬。くつろいだ様子で隣に立っているのはご主人のロバート・アンドルー様。流行の水色のドレスを着てロココ椅子に座っているのは奥様のフランシス様。結婚したばかりの、このお二人を描いたのは、トーマス・ゲインズバラさん。ロンドンで絵画を学んでいたゲインズバラさんは、お父さんが亡くなって故郷のサフォーク・サドベリーに帰ってきたんだ。アンドルー様とは子供時代を一緒に過ごした仲だから、肖像画を頼



トーマス・ゲインズバラ 《アンドルー夫妻の肖像》 1748~49年 ロンドン・ナショナルギャラリー蔵

まれた。当時肖像画は大層人気があったけど、ゲインズバラさんは、本当は風景画を描きたかったんだよ。絵を良く見てごらん。バックの風景は、奥様が持参した土地と併せて更に広大になったアンドルー様の領地。結婚式を挙げた教会や、収穫された小麦の束も見えるよね。ゲインズバラさんのち密な観察力は、変わりやすいイギリスの

天候もちゃんと描いている。お二人と僕の肖像は室内で制作し、キャンパスの中で一つの絵になった。こうして肖像画と風景画の二つを一緒にするという新しい画風を確立したゲインズバラさんは一躍有名になったんだ。彼は故郷のサフォークの景色を愛していて、たくさん描いた。ゲインズバラさんの絵画は少し後に生まれたカンスタブルにも影響を与えたから、今でもサフォークでは二人の画家の描いた美しい自然をたくさん見ることが出来るよ。

さて、この絵には謎があって、奥様の膝の上には何も描かれていない。これについては、「これから生まれる子供のスペースだ」と言う人や、「アンドルー様が撃った雉を置くはずだった」と言う人もいる。いろんな想像が出来て楽しいよね。

ともかく僕は幸せさ。大好きなご主人様とずっと絵の中で一緒にいるんだから。ありがとうゲインズバラさん。

[富岡洋子]

高松市美術館は、2015年1月から16年3月(予定)まで、大々的なりリニューアルのため休館中で、その間を利用して念願だった一泊旅行に出掛けました。1日目は金沢21世紀美術館へ。開かれた美術館というコンセプトの通り、外との垣根がなく、人々が自由に行き来できる美術館です。展示作品が素晴らしいことはいうまでもないのですが、この美術館へのリピーターが多い要因は、誰もが気楽に行ける美術館だからではないかと感じました。印象に残ったのはジェームス・タレルの『ブルー・プラネット・スカイ』。天井の四角い開口部から空を見上げるこの作品は、クライマックスが日没前30分だそう、空がブルーから濃い青へ、そして黒へと変化していく光のショーを楽しむものです。仕掛けがあつて、実際よりは鮮やかなブルーが楽しめ、外へ出て空を見た時、色が違っていることに気づきます。静かに空だけを見続けることは、時間に追われる日々からはあり得ないことで、この時だけはゆったりと流れる時間を楽しむことができました。2日目は、次のとおり、3つの班に分かれて市内観光を行います。

成巽閣へ。前田家12代の奥方の御殿で、加賀百万石だけあつて粋を凝らした建物とお道具類は見応えがありました。次は、石川県立美術館の鴨居玲展へ。自己探求の画家といわれている鴨居玲展は、深く暗く力強い。画面から鴨居のうめき声が聞こえてきそうです。それとは反対に、デッサンの人物は、なんと生き生きとしているのでしよう！この美術館内には、有名パティシエ辻口博啓氏のカフェがあり、スイーツを堪能してから、鈴木大拙館へ。静謐な建物は一見の価値があります。金沢は、伝統とモダンがうまく融合した心地よい街でした。また行きます。

〔横井真由美〕

B班▼金沢城↓鈴木大拙館↓長町武家屋敷

金沢城を散策した後は、石川県立美術館へ行き1階にある有名パティシエのカフェで早くも休憩。展示を見る間もなく、鈴木大拙館へと移動し、禅の真髄に触れ、最後は長町武家屋敷へ。今も江戸時代の土塀が続く街並みを歩き、鍋木商舗という九谷焼のショップに入りました。九谷焼といえば「三代徳田八十吉展(2011年高松市美術館開催)」を思い出します。鍋木家当主が集めたという展示品の中に徳田八十吉・初代から四代までの作品があり、作家の地元で作品を見るのはいいなあと思いました。「三好ひさ子」

金沢城を散策した後は、石川県立美術館へ行き1階にある有名パティシエのカフェで早くも休憩。展示を見る間もなく、鈴木大拙館へと移動し、禅の真髄に触れ、最後は長町武家屋敷へ。今も江戸時代の土塀が続く街並みを歩き、鍋木商舗という九谷焼のショップに入りました。九谷焼といえば「三代徳田八十吉展(2011年高松市美術館開催)」を思い出します。鍋木家当主が集めたという展示品の中に徳田八十吉・初代から四代までの作品があり、作家の地元で作品を見るのはいいなあと思いました。「三好ひさ子」



A班▼兼六園↓成巽閣(せいそんかく)↓石川県立美術館(鴨居玲展)↓鈴木大拙館

三大名園の一つ、兼六園を散策後、隣接する



《ブルー・プラネット・スカイ》を鑑賞中(金沢21世紀美術館)

C班▼ひがし茶屋街↓「志摩」お茶屋文化館↓鈴木大拙館

石川の小さな京都と言われるひがし茶屋街に行きました。江戸時代後期加賀藩公認の茶屋街として誕生しました。今も石畳みと紅柄格子が続く当時の花街の街並みがそのまま残っています。

次は、国指定重要文化財、「志摩」お茶屋文化館へ。1820年に建てられた当時のまま残るお茶屋で二階が客室となっています。優美な造りで江戸時代にタイムスリップしたような気分。市美の一人が太鼓の打ち方を教わる貴重な



体験をし、楽しい時間を過ごしました。最後は、金沢市出身の仏教学者鈴木大拙にちなんだ施設を訪れました。斬新な建物の設計者は金沢市ゆかりの谷口吉生氏です。浅い水盤に面した真っ白な箱のような建物、水面は鏡のように空樹木建物を写し時折音がし、さざ波をたてます。目で景色を視、耳で音を感じ静かで落ち着いた空間。のんびり刻が経つのも忘れて過ごしました。お楽しみのお食事は、美しい金沢駅近くの寿司屋さんへ。能登七尾漁港から直送のネタを美味しく頂き、心も体もリフレッシュした状態で帰途につきました。

〔皆見礼子〕

京都 アート便り

昨年まで高松市美術館/高松市塩江美術館学芸員として勤務し、「高松コンテンポラリーアート・フェスティバル」大竹伸朗展「速」など、意欲的な現代美術の展示を手がけてきた毛利義嗣さん。2015年度より京都の大学で教鞭をとる毛利さんに、エッセイを寄稿していただきました。

昨日、私が勤めている大学のホール(春秋座で川口隆夫ソロダンス「大野一雄」について)があった。1990年、開館して間もない高松市美での大野一雄・慶人「睡蓮」の賑やいだ公演をありありと思い出しつつ見ていたところ、どうも違和感。トリビュート大野の作品、ではなく大野のいくつかの公演の動きを完全コピーしているのだという。馬鹿な・何のために・しかも本人は大野の舞台を生で見たことはないという。けれども、大野一雄をよく知るダンサー、批評家は、不完全であれ器が継承され、それはただ形なのだが、形がいれば魂を半ばであれ再生することに、意味を感じていたようなのだ。あるいは半ばではなく奇妙にオリジナルなもの萌芽として。

芸術とはそういうもので、伝えようとしても、創り手の消滅によって絶対的に伝わらないのだが、ただ伝えようとする意思が何かしらモヤモヤとした胞子を生み出す。・美術館での展示会や催し物もまた、そうした不完全であるからこそ再生する装置なのだろうか、とも思わされた。それはまた例えば、教員一生徒、美術館？ という非対称的な関係の中でこそどこか遠方から帰帰するものとして存在するのかもしれない。

〔京都造形芸術大学准教授・毛利義嗣〕

編集後記

- ◎civiの仲間と金沢に旅しました。観光客で賑わうなか、建物が素敵な鈴木大拙館は現代の禅寺のように私達を静かに迎えてくれました。〔鈴木典子〕
- ◎金沢では、前田家の庇護のもとで作られた美術工芸品に、ただうっとり。皆で食べたお寿司、美味しかったです。〔富岡洋子〕
- ◎よき仲間との旅は、これまた良きものなり。感謝！〔横井真由美〕
- ◎世界三大名画と言われる内の二点「オルガス伯爵の埋葬」「ラス・メニーナス」をみることができました。迫りに圧倒されました。その日は異国の空気に包まれながら迎えた誕生日と重なり感動しました。〔皆見礼子〕
- ◎京都・青龍殿の吉岡徳仁のガラスの茶室『光庵』は、秋の光の中キラキラと

- 虹色に輝いていました。でも、シトシトと雨が降り、霧が流れる。一服のお茶…幽玄の世界を夢想するのです。〔山上昭代〕
- ◎2015年1月から始まった美術館の大規模改修工事も終盤に差し掛かり、3月予定のリニューアルオープンを目前に控えました。展示室は床も壁も照明もすべて更新され、こども+という子どもを中心とした新たな施設も稼働します。コレクション紹介を軸とする、あれこれ楽しい読み物を満載した書籍が発行されます。他にもいろいろな箇所が新しくなります。これからスタートに向けてのラストスパート(変な言い方！)が始まりますが、疲労で倒れてしまわないよう、気をつけながら頑張ります。高松市美術館2.0にぜひ、ご期待ください！〔高松市美術館学芸員 牧野裕二〕